

平成22年度病害虫発生予察特殊報第5号

平成23年3月28日
愛知 県

- 1 病害虫名：メボウキ（バジル）菌核病（*Sclerotinia sclerotiorum*）
- 2 対象作物：メボウキ（バジル）
- 3 発生地域：東三河地域
- 4 発生確認の経過
平成20年11月に東三河地域のメボウキ（バジル）栽培ほ場において、枝葉が褐変して萎れ、白いかびと菌核を生じ、最終的には枯死する被害を確認した。
被害株からは高率に同種の糸状菌が分離された。愛知県農業総合試験場で、分離された糸状菌の病原性、形態を調べ、*Sclerotinia sclerotiorum*と同定した。なお、本菌によるメボウキ菌核病の発生は本邦での初確認である。
- 5 病徴
枝葉が褐変して萎れ、白いかびと菌核（図1、直径5mm程度の不整形黒色の塊）を生じ、最終的には枯死する（図2）。
- 6 病原菌と伝染
病原菌は糸状菌の一種で、子う菌類に属し、寄主範囲はきわめて広く、キャベツを始め64科、361種以上の植物に及ぶ。菌核と菌糸の形で被害植物とその残さに付着して、次作の伝染源となる。
春または秋に菌核から、子う盤（図3、直径5mm前後の小型のキノコ状、形成には適湿と適温（15～20℃）が必要）が発生し、この子う盤から子う胞子が飛散する。
子う盤から飛散した子う胞子が、湿度の高い部分で発芽し、老化した部分や傷口などから侵入し発病する。
被害植物には、最初白い綿状のかび（菌糸）が生える。その後菌糸はからみ合って菌糸塊となり、さらに成熟して黒色のネズミの糞に似た菌核となる。
病原菌の活動は20℃前後で最も旺盛となり、30℃以上の高温では休止する。5～10℃の低温ではゆっくりと活動する。
- 7 防除対策
施設栽培では、換気を励行し湿度が高くないよう管理する。
発病株は早めに抜き取り、土中に深く埋め込む等処理し、菌核をほ場に残さないようにする。
- 8 連絡先
農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除グループ
電話：0561-62-0085（内線471）



図1 病斑に形成された菌核

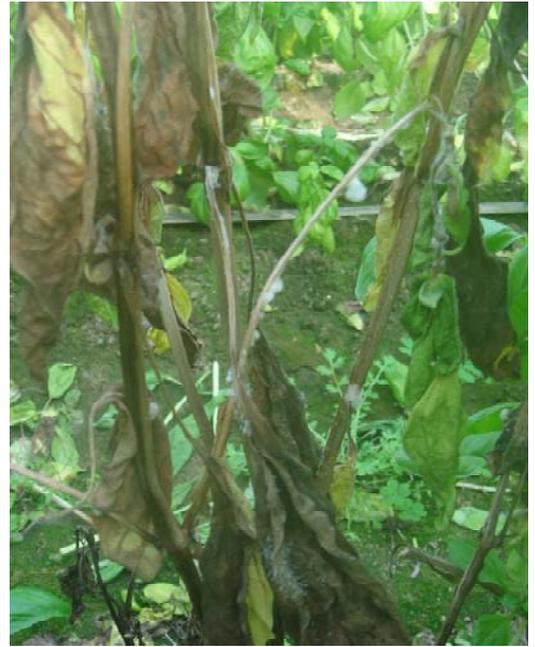


図2 メボウキの株枯れ症状



図3 菌核から発生した子のう盤